
かおすぶ

王壘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かおすぶ

【Nコード】

N3240T

【作者名】

王蠱

【あらすじ】

変人部長のせいで背負わなくてもいい苦勞を背負わされることになった

科学部部員たち。基本のほほん、部活風味コメディ。

1話（前書き）

オリジナル作品初投稿。

暇つぶし程度に読んでいただければ幸いです。

1話

「で、本題の今年の活動計画について何か意見ある者、いるか？」
促すような部長の言葉にしかし手を上げる者は誰もいない。

テーブルを囲むように座った部員達は皆一様にめんどくさそうな目を前方、

『。年度科学部活動計画』と白のチョークで書かれた黒板を眺めるだけ。

「部長、それって絶対に決めなきゃなんないんですか？つてか、去年決めた記憶がないんですけど」

確認する副部長の金崎夕かなさき ゆうにもだが部長は首を横に振る。

「去年というか一昨年もその前も、生徒会の記録によると科学部くわがくぶはもうここ十年くらい提出してないらしい」

「は？」

「それで歴代の部長どものツケが遂に回ってきてな。

まったく、せめてあと少しだけ待ってくれば・・・」

チラ、と後輩たちを横目で見える部長。レンズ越しの視線に込められた内心は

しかし直前の言葉と絡み合って恐ろしいくらい正確に伝わる。

『せめてあと少しだけ待ってくれば、こいつらに全部押し付けられたのに』

面倒は解決するより起こす方が楽しい、と常に言ってはばかりない彼女の性格を

理解できてしまえていることに他の部員たちはそれぞれ疲れたような息を漏らす。

「まあ来てしまったものは仕方がない。とにかく決めよう。

生徒会の方にもさっさと提出しないと廃部だと脅されてるんでな」

「は、廃部ですか・・・？」

おずおずと、という言葉がぴったりな感じで小さく質問の拳手をし

たのは

後輩の一人、なぎやまきょうね 凧山京音だ。

病的一步手前とでも表すべき白さの肌を制服の端から覗かせる彼女のそんな声にも

だが部長——たけみや 竹宮島流は「そう」と豪気な笑みを浮かべるだけだ。

「最初呼び出された時の脅し文句は今年度の活動予算ゼロ、って話だったんだが

それじゃちよつとやる気が起きないんでな。挑発しまくって廃部の危機を作ってきた！」

勝ち誇るように親指をグツ！と立てる島流。

「あ、あんたなに考えんですか一体?! なんでわざわざリスク上げるような真似してんですか!?!」

「ちなみに廃部の場合、今年度使われるはずだった科学部の予算は校舎の修繕費・・・

などを経由して最終的に私のポケットマネーになる」

「この人自分の部潰す気まんまん?!」

「コウ、少し落ち着きなさいん」

必死にツッコむ支倉幸一と、そんな彼をなだめる支倉燕。さくら

双子の姉弟をしばし面白そうに観察していた島流だったが

「とにかくにも、あと45分以内に提出しないと廃部だから、科学部」

「「「「45分!?!」」」」

夕と後輩トリオはぎよつとして壁にかけられた時計を見やった。

現在時刻PM3:15。4時まで立案・提出しなければ部活消滅。この場の誰も普段はそれほど熱心に部活に臨むメンツではなかったのだが

「「「「さつさと決めましょう!」」」」

切羽詰まった現状に何か動かされたのか、頭を抱え出した同級生と

後輩たちを島流は
意地の悪そうな顔のままみつめる。

「年間通しての計画だからなー？簡単な実験の短発とかじゃなくて
複雑でも

時間のかかんの出来るだけ頼むぜ」

「はい部長！思いつきました！」

まず手を上げたのは夕だった。現在2年生2名、1年生3名のこの
部において

昨年度からの付き合いである彼は現メンバーの中で最も部長のツボ
を熟知している。

「錬金術がやりたいです！」

「はい決定」

「……って待て待て待て！」

即効で書類に『錬金術』とだけ書いて出ていこうとする島流を後輩
トリオは呼びとめる。

「ん？お前らなにか不満でもあるのか？」

「不満というかむしろ不安しかないんだよこのダメ部長！」

立ち上がった幸一は部室と廊下を隔てる引き戸の前に仁王立ちして
部長の退室を防ぐ。

科学部の部室たる第二科学室は校舎三階の廊下のどんづまりに位置
し、

廊下に出れる扉はひとつしかない。長方形の部屋のうち黒板から見
て両サイドの壁は

薬品や実験器具の収納スペース、そして正面は採光の為かほぼ壁一
面が窓になっているという造り。

要はこの唯一の出入り口さえ押さえてしまえば誰も外には出れない。

「何が不安なんだよ？せいぜい石ころ金きんに変えたり賢者の石創きずつたり
ホムンクルス
人工生命体誕生させるくらいの

ものすごく地味で堅実な研究のどこに不安要素がある？」

「今あんたの言ったこと全部！」

ビシィー！と突きつけられた人差し指はだが見ようとせず、
島流は突破の隙を窺うように体を左右に小さく揺らす。

「副部長もなんでこんな突拍子のない提案を・・・？」

「いやさ、この人これくらいのこと言わないと納得してくれないか
ら」

京音の疑問に悪気なく頭をかきながら返す夕。

「そりゃ現実的な案だつていくつかあるよ？」

天体観測とか河川の水質調査とか、あと機械的なもの作るとか」

「？じゃあなんでそれを言わないん？」

「だから、あの人の意識を誘導するにしても手順があるってこと。
具体的に言つと、最初の無茶ぶりで思い切り引き付けて、

そこから徐々にハードルを下げてくように仕向ける」

「それ、なんの意味があるん？」

「少なくともあの人の・・・」

と、そこまで夕が言ったところで。

「ちょ、ちよつと待ったぶちょ・・・！？」

慌てるような幸一の声。身を寄せてひそひそと小声で話していた三人はなにごとかと一世に顔をあげ。

「じゃ、ちよつと提出してくるから」

ガラッ。カツ。バツ！

そんな三つの動作音に続いて部長の影が落下していくのが見えた。
窓ガラスの向こう側に。

1話（後書き）

プロフィール

たけみや としる

竹宮島流

性別：女

年齢：17歳（高校2年生）

所属：科学部（1話現在）

役職：部長（1話現在）

好きなもの：無茶、混沌、刺激的な事象全て

嫌いなもの：退屈、ありきたりなこと

とにかく力オスなことが大好きな科学部部长。

知力・身体能力とも人並み外れている上

実家は金持ちという超人だが、それを補ってあまりあるくらいの変人。

ちなみに着用しているのは伊達メガネで、視力は両目ともサンコンさん並みで測定不可能。

感想などありましたらどうかお聞かせください。

2話

「なんだお前ら、今日はずいぶんと早いじゃないか？」

「・・・・・・」

見慣れたはずの第二科学室の扉を開いた支倉姉弟は、おなじく嫌というほど聞きなれた声と

しかし室内の光景との違和感に思わず足を止めた。

「？どうかしたか、そんなところで固まって」

珍しく気遣うように話しかけてくる島流部長の眼前、実験机の上に置かれたのは

銀の燭台の上で煌々じやうじやうと蒼焰を躍らせる蠟燭。

遮光カーテンが閉じられた部屋の中、視線をずらせば彼女だけでなく同じ机の上に全部で六本、

『ここに座つて』と言わんばかりにそれぞれの椅子の前に同様の物が配置されている。

「・・・・・・」

先にこの現場に来ていたらしい夕と京音は沈黙したまま、だが明らかに陰鬱さと面倒くさを織り交ぜた瞳で炎の揺らぐ様を観察している。

「・・・・部長、これはどんな種類の冗談ですか？」

室内に漂う硫黄系の臭いに耐えかねたように幸一は窓辺へと向かうと黒い遮光カーテンと窓を全開放、日光と新鮮な換気を取り入れると今度は蠟燭の方を消していく。

「あつ、勝手になに消してんだよ。この蠟燭はその人物の残りの寿命を示していてだな・・・・」

「いやそういう話は後でいいですけどね、唐突に何やってんですかアンタは？」

先輩とか部長とか、一応とはいえ目上の者に対する敬意というやつがこれっぽっちも感じられない幸一。

「ほら夕先輩に京音もちやんとしゃきつとして」

「うう・・・頭痛い」

肩を落とし力なくうなだれる夕と京音。硫黄の臭気にやられたのだろつ、

両者とも目の焦点はなかなか定まらずふらふらと揺れ続け、普段から多少以上に虚弱体質的の気がある京音に至っては机の天盤に突つ伏したまま微塵も動く気配がない。

「おい風山、大丈夫かん？」

心配そうに顔を覗きこむ燕にもやはり彼女から反応はなし。

「まったく、京音はともかくとして夕までこの調子か。」

本当にうちの連中は万事につけて耐性がないな」

言いつつ自分は机の下から取り出した小型の酸素吸入器のようなものを使っている部長。

アスリートがたまに使うガスボンベのような商品表面に印刷された商品名は『ハワイの空気』。

思いっきり胡散臭い。

「・・・ってか部長！怒るのはとりあえず後回しにしてあげますから、それすぐ京音にあげて！」

だんだん「ケホッ」から「ゲホッ!」、さらに「ゴホ、ゴッホゴホ、グハッ!」まで

レベルアップしていく京音の咳。

背中をさすってやりながら幸一は「さっさとよこせ」と無言で手を差し出す。

涙目になっている少女の姿に流石に罪悪感が出てきたのか、

自前のバッグから新しい酸素の缶を取り出した島流はそのまま軽く投擲、

受け取った幸一は開封すると漏斗状になっている口部分を背後から支えたままの体勢で

京音の唇へと運ぶ。

「うつ・・・」

薄く空気が漏れるような声も一瞬、幸一の手から酸素缶を受け取った彼女は

深呼吸するようにスーハースーハー、だんだんと呼吸を安定化させていく。

まるで赤ん坊が哺乳瓶にくらいつくような吸いつぶり、

『アラスカの空気』と書かれた商品名をただなんとなく眺めていた幸一の意識の外では。

「ケホ・・・部長すいません。私にも何かください・・・」

「ほれ」

「ありがとうございます・・・」

『ヘリウムガス』とカタカナでおもいつきり書かれていることにもまったく気付かず、

疲れた目のタが□元でシュコシュコとそれを吸っていた。

2話（後書き）

1話 1000 2000字くらい、

本当に軽めの文量で続けていこうと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3240t/>

かおすぶ

2011年5月19日23時31分発行